【287】

氏名（本籍）	山本建郎（東京都）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博乙第1,470号
学位授与年月日	平成11年1月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	アリストクセノス哲学の研究 ー『ハルモニア原論』を中心としてー

主　査	筑波大学教授	文学博士	廣川洋一
副　査	筑波大学教授	文学博士	藤田晋吾
副　査	筑波大学教授	文学博士	堀池信夫
副　査	筑波大学教授	Ph. D.	荒木美智雄
副　査	筑波大学教授	Dr. phil.	和田　廣

論文の内容の要旨

本論文は，アリストテレスの高弟アリストクセノスの『ハルモニア原論』の議論を吟味し再構成することを通じて，その哲学としての性格を明らかにし，それによって「哲学者」アリストクセノス像を解明することを意図している。

本論文は，序論（忘れられた哲学者），第一章（アリストクセノスの生涯と著作），第二章（先行思想），第三章（『ハルモニア原論』のテキスト），第四章（『ハルモニア原論』の理論構成），第五章（『ハルモニア原論』の哲学）および付録（アリストクセノス『ハルモニア原論』の翻訳と注釈）から構成されている。

序論では，『ハルモニア原論』を考察することはたんに音楽理論を明らかにする意義だけではなく，それ自体哲学的知に連なるものの究明の意義を持つものでもあることが，古代ギリシアにおけるハルモニア論の在り方に触れることで主張される。

第一章では，主として『スダ』などの資料により，その生涯と著作の概要が述べられるが，そこではまず，アリストクセノスの知的形成がピュタゴラス主義とアリストテレス哲学に基づくものであることが指摘される。また，アリストクセノスの著作断片としては比較的まとまって残されているピュタゴラス派に関する批評的文書『ピュタゴラス的格言』および『ピュタゴラス的生』を分析することで，そこに「哲学者」アリストクセノスを知る手がかりを得ることが試みられる。それらの二著が，ピュタゴラス派の神秘的かつ因習的な直観内容を示す文書『訓戒（アクゥスマタ）』『象徴（シュンボーラ）』を合理的に再構成したものであることが指摘され，アリストクセノスがプラトン，アリストテレス的な哲学に定位していることが明らかにされる。

第二章では，ハルモニア論の歴史的な系譜が論じられる。そのための基礎資料としては，当の『ハルモニア原論』そのものの他に，3世紀のアリスティデース・クィンティリアーヌスや2世紀の理論家プトレマイオス，偽プルゥタルコスの証言が採りあげられる。またアリストクセノスととりわけ関係の深いピュタゴラス派に関しては，ピュタゴラス当人の他，ピロラオス，アルキュタスについて詳細に検討される。

第三章では，つぎはぎ細工の印象を与える面を持つ『ハルモニア原論』の構成を再検討して，それを統一的に把握することが試みられる。古代の証言によれば，『ハルモニア原論』全三巻は，『原理論』（α巻）と『要素論』（β，γ巻）の二つの著作の合体したものとされる。これを初めて統一的に解釈しようとしたのは，ウェストファルである。彼の独創的な構想にはこれまでに多くの批判が寄せられたが，『原理論』と『要素論』の二本立ての

構造でも，ウェストファルの構想を生かすことは可能であることが主張される。さらに両者の先後関係が検討され，『原理論』は最初に公理系を模して構想された『要素論』をメタの視点から検討した弁証論であると論じられる。

第四章では，主として『要素論』によりながら，アリストクセノス流のハルモニア論の理論構成の実際が描き出され，その特質が論じられる。①まず，テトラコードの分割の問題が考察され，②ついで1オクターヴの音階は，上記のテトラコードを間にトノス（全音）の音程を置いて接合することによって得られ（離接），その周期的な繰り返し（連接）において2オクターヴの大完全音階が得られること，そこでは四番目の音同士が4度で調和し，五番目の音同士が5度で調和すること，③さらにこれらの構造（調和関係）は，単位音程であるトノスに潜在することが明らかにされる。以上の認識は三つの原則によって表現されるが，公理系として見るなら，その三者は三つの定義と一つの公理と系にまとめられること。ハルモニア論の諸命題は，そこから演繹される諸定理として位置づけられることが主張される。

第五章では，ハルモニア論の理論構成の基礎をなす楽音について，音とは何なのか，音が聞こえるとはいかなることか，と問うところから『ハルモニア原論』の哲学の始まることが指摘される。すなわち，前者の問に対しては，音の素材である声にまで遡って，音声の自然学的観点から解答され，後者に対しては，直覚知的な感覚論として，魂の働きに即して本質論的な観点から解答の論議がなされる。具体的には，まず，楽音に関するアリストクセノスの自然学的理解では，音は声の静止形態であり，一定の高度の立ち現れとされることが指摘され，ここに音の実体論的な把握が見て取られること，しかし概念的な撞着も見られることが主張される。ついで，音固体のあり方が考察される際，それは実際に聞かれているこの音の在り方を究明することによってなされていることが論じられる。ただしここにいう音はハルモニアを構成する調和関係にある音であるから，個体としての特定の音が調和関係をなす音として判定されるのはいかなる経緯によるのか，という形で具体的に問われる。この場合，音の判別者は理性以外ではありえない。このような理性によって把握された音個体こそ，アリストレレスの実体論の構造を伝える具体的事例であることが論じられ，アリストクセノスのハルモニア論が総じて実体論の具体的実演の性格を持つことが主張される。そして以上のような楽音に関する，彼の自然学的，実体論的アプローチのうちに，「哲学者」アリストクセノスの面目を見てとることができると結論される。

審査の結果の要旨

本文校訂・注解などの文献学的成果および音楽理論家としてのアリストクセノスの研究は別として，「哲学者」アリストクセノス像の解明を意図した研究は，わが国においては皆無，欧米諸国においてもその数はきわめて乏しい。本論文は，アリストクセノスの残存著作中唯一そのほぼ全体像を窺うことのできる『ハルモニア原論』に基づき，これを詳細に分析することによって，さらにアリストテレス哲学との密接な関連を視野に置きながら，この問題に取り組んだ労作である。

本論文に示された新しい知見として，まず①アリストクセノスの「哲学者」としての立脚点を，音楽という特殊な領域における固有な実在としての音（楽音）をモデルにした実在論の構築にあるとする観点から，ハルモニア論が実体論の具体的な実演であること，それがアリストテレス的実体論のある面での限界を補完するものであることを明らかにし，②これによってアリストクセノスをアリストテレス哲学の正統的な展開の系譜に連なる「哲学者」として位置づけたこと，さらに以下個別的事項として，③『ハルモニア原論』の理論構成を分析することで，古代ハルモニア論の基盤をなす完全音階の構造を確認し，それに基づき，アリストクセノス固有の演繹的なハルモニア論の理論体系を復元したこと，④『ハルモニア原論』における先人批判の叙述から古代ハルモニア論の歴史的展開の跡を復元し，周辺の証言とも併せ考察することにより，「ハルモニア音階」の消長に対応した古代ハルモニア論の系譜を跡づけたこと，⑤ピュタゴラスおよびピュタゴラス派のハルモニア論を整理して，

アリストクセノスの理論との関係を明らかにしたこと等があげられ，これらの注目すべき成果は，今後のアリストクセノス研究のみならず，古代ギリシア精神史研究の全般に対しても少なからぬ寄与をなすものであると認められる。

しかし他面において，資料的に厳しく制約されながら，アリストクセノスの「哲学者」としての全体像を解明するという意図に伴う，いくつかの問題点が指摘されねばならない。資料の乏しいなかでは，全体像を明らかにするためにあらゆる手がかりを求めて考察が試みられなければならないが，『ハルモニア原論』において，おそらく一つの重要な手がかりとなるべき点，すなわち著者もいう「魂の問題の処在を示唆するもの」(p. 15) としてのハルモニアの側面，ハルモニア論と倫理的性格（エートス）のかかわりの問題が存在したと考えられる。しかしこれについては，問題提起はなされ，各所で言及されはしたが，それ自体として深く立ち入った形で考察されることのなかったのは，資料上の制約は十分考慮されるとしても，「哲学者」の全体像の解明のために惜しまれる。また，主要な説明概念として論文中に多用される「弁証論，弁証論的」などの用語が必ずしも厳密ではなく，これによって論述に不透明さが残るにいたったこと，五章第２節での，聴覚，記憶，表象，理性の取り扱いにやや正確を欠く点が見られたことなど，これらの点については今後の著者による検討と研究が期待される。

以上のような問題点はあるとはいえ，著者の斬新な視点と，多年にわたるアリストテレス研究の学識の基礎の上に成立した本論文は，わが国における初の本格的なアリストクセノス研究として，学界に対して寄与するところ少なくないものと評価される。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。